

社会に支持される笑い

——キングオブコントから見るボケとツッコミ——

四方田咲花

本論文の目的は、漫才研究と比較して十分に論じられてこなかったコントに着目し、コントにおけるボケとツッコミの構造がどのように成立し、またそれが社会とどのように関係しているのか明らかにすることである。分析対象は「キングオブコント」である。

まず、漫才におけるボケとツッコミの先行研究を整理した。漫才が二人の会話と関係性を基盤に、逸脱するボケと常識へ回収するツッコミによって成立する、比較的安定した構造をもつ芸であることを確認した。一方、コントは役柄や設定、空間から笑いが生まれ、ボケとツッコミの役割が固定されないため、分析が困難である故に、コントは十分に論じられてこなかったことを示した。そこで本研究では、コントを分析するために漫才との比較を試みた。

分析対象として M-1 グランプリとキングオブコントを取り上げた。M-1 グランプリが結成年数制限を軸に漫才文化を更新する中心的装置であり、その影響から THE MANZAI や THE SECOND といった大会が生まれたことを示した。これに対し、キングオブコントは結成年数制限がなく、世代を超えて参加可能な唯一のコント日本一決定戦として独自の価値をもつ大会であると位置づけた。

その上で、キングオブコントのネタを下ネタ、ジェンダー観、労働問題、不祥事、暴力性といった観点から分析し、コントがその時代の社会規範や価値観を前提として成立していることを示した。近年は、旧来的な価値観をそのまま提示するのではなく、ズラしや反転によって笑いを生み出す傾向が強まっていることが明らかになった。

笑いを受容する立場である観客に注目すると、同業者中心から一般観客中心へと移行したことで、キングオブコントは「内輪の評価の場」から「社会を映す番組」へと変化したといえる。近年のコントでは舞台上に明確なツッコミ役が存在せず、視聴者や世間がツッコミを担う構造が増えている。観客構成の変化とボケ・ツッコミ構造の揺らぎや変化が生まれたことを明確にした。

本論文はキングオブコントを、社会の価値観や違和感を笑いへ変換する媒介的な場として位置づけた。コントは社会規範を利用し反転することで成立し、その許容範囲の微妙な塩梅の中で笑いが生まれる。ゆえに今後も、コントは社会と相互作用しながら、笑いの基準を更新し続ける表現であると結論づけられる。